

福井県の第三セクター、えちぜん鉄道（福井市、略称えち鉄）が10月に全線開業から10周年を迎えた。地域ぐるみで廃線のピンチを乗り越え、今や「再生から成長へ」を合言葉にさらなる飛躍を目指そうとしている。その取り組みは、人口減少に苦しむ地域を活性化するヒントになりそうだ。今月17日、自民党の若手国會議員がえち鉄を視察した。同社幹部から鉄道復活の経緯と今後の計画の説明を受け、車内では名物の女性アテンダントとも歓談。三原じゅん子女性局長は「運輸業だけでなく、サービス業としても人と地域を結びつけている」と評価した。

えちぜん鉄道開業10周年

列島追跡

えち鉄の前身である京福電鉄は、2000年と01年に2度にわたる正面衝突事故を起こし、国土交通省か



自民党の三原じゅん子女性局長（右端）らはアテンダントと歓談した（17日、福井市）

7割は鉄道未業務をこなす。他の鉄道に比べて、お手本はなく、独自にサービス手法を練り上げた。安心して乗車できるという評判が広がり、鉄道会社ばかりか航空会社やメーカー、銀行も視察に訪れた。住民の支援組織などが「乗って残そう」運動を展開し、会社も駅前に無料駐車場を整備するなど利便性の向上に努めた。この結果、04年度に242万人だった乗客数は、12年度に325万人と34%も増えた。この間、沿線人口はわずかながら減っており、驚異的な乗客増といえる。会社設立から10年は自治体が赤字を補填していたが、12年2月に作られた新10力年計画では、自治体の負担はインフラにかかわる費用のみ。会社は旅客輸送の収益力向上に専念することになった。12年度は黒字決算となり、13年度も引き続き黒字の見通しだ。豊北景一社長は「コストカットしつつ、健全な経営体質をつくりたい」と話す。今後は路面電車の福井鉄道福武線との相互乗り入れ、福井駅周辺の高架化など大型事業が相次ぐ。来春には人気の観光施設である福井県立恐竜博物館（勝山市）に訪れやすいようにする特急「恐竜エクスプレス号」（仮称）を新設する。県外からの観光需要を見込みながら、21年度には乗客数333万人を目指す。（福井支局長 池辺豊）

地域一丸、成長路線に

ら全線の運行停止命令を受けた。バス代替輸送はダイヤが不安定なため、次第にマイカーの利用が増え、特に積雪期には地域の道路交通は大混乱となった。今では「負の社会実験」とまで総入れ替えとなり、社員の高齢者や身体障害者の介助、観光案内という3つの

事象を收拾すべく、02年に京福の事業を引き継ぐべく、えち鉄が新たに取り組んだのはサービスの向上。その象徴がアテンダントの採用だ。車内での切符販売、自治体が7割、企業や住民などが出資。経営陣は、高年齢者や身体障害者の介助、観光案内という3つの

業した。